

宮城県南三陸地域におけるイヌワシの生息環境の再生について

東北森林管理局 置賜森林管理署 森林官補 根木 浩輔
(元 計画保全部 計画課)

1 課題を取り上げた背景

宮城県南三陸地域では、古くからイヌワシの生態が研究されており、南三陸町ではイヌワシが町の鳥に指定され、町内の中学校校舎のレリーフに用いられるなど(写真1)、地域に親しまれてきました。しかし、林業が衰退し、狩り場が減少したことにより、イヌワシの生息



(写真1：中学校校舎のイヌワシのレリーフ)

環境は危機的な状況にあり、繁殖つがいも次々と消滅しています。

この状況を踏まえ、国有林を含めた地域の森林所有者、自治体、自然保護団体等が参画し、2015(平成27)年に「南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト」を発足させました。本プロジェクトは、イヌワシを東日本大震災からの復興のシンボルと位置付け、民国が連携して、森林資源の循環利用を推進し、イヌワシの狩り場ともなる伐採地・造林地を継続的に創出することで、イヌワシの生息環境の再生と林業の成長産業化を目指しています。

2 取組の方法

プロジェクトのフィールド内の国有林で、主伐期を迎えたスギ等の人工林及びその周辺の現地調査を行い、以下の3点を念頭に、具体的な施業方法を検討しました。

- ① イヌワシの狩り場となる伐採地・造林地の継続的な創出。
- ② 林業の成長産業化のため、施業の低コスト化・省力化を図り、併せて、地域の広葉樹需要に応えるため、広葉樹二次林の単木的利用。
- ③ 周辺一帯の生物多様性の保全に資するため、良好な溪畔林の育成。

3 結果

現地調査・検討の結果、具体的な施業方法は以下の3点をポイントとしました(図1)。

- ① 人工林の主伐については、イヌワシの狩り場となる伐採地の創出頻度

を高めるため、小班内を帯状に分け、時期をずらして15年ごとに皆伐。

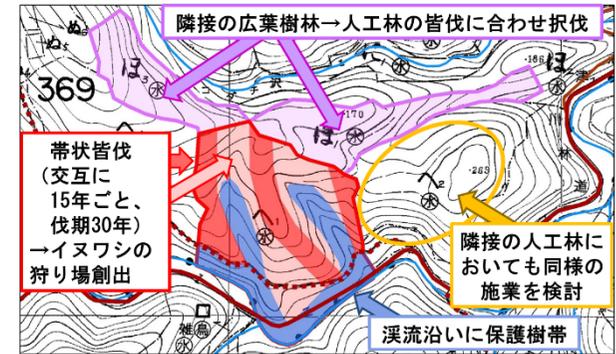
- ② 再造林については、短伐期施業を行い、樹種は合板材需要に対応するカラマツとし、低コスト化のため1,000本/haの低密度植栽。植栽方法は、下刈面積の低減に繋がる2条植え。併せて、人工林の主伐の実施と同時に、周辺の広葉樹二次林において択伐を行い、地域の広葉樹需要に対応。
- ③ 溪流沿いに保護樹帯を設定し、間伐を繰り返して広葉樹の侵入を促し、将来的に良好な溪畔林へ誘導。

イヌワシの研究者、林業経営者等の地元関係者を現地に案内し、これらの検討結果を説明したところ、この施業方法の採用により、イヌワシの生息環境の再生と林業の成長産業化の推進が期待されるとの評価が得られました。

4 考察

森林資源の循環利用と生物多様性の保全の両立のためには、現地の状況に応じた様々な視点からの考察が不可欠です。特に主伐を行う場合は、適切な伐採区域設定や的確な施業方法を採用することで、生物多様性の保全にも十分に寄与できるという結論に至りました。

今後も、関係団体間の連携を密にし、国有林における施業の効果についての情報を収集し、さらに効果的な施業方法を模索しながら、イヌワシの生息環境の再生と林業の成長産業化に繋げていきたいと考えています。



(図1：具体的な施業方法の案)